令和４年度　学校自己評価システムシート　（ さいたま市立文蔵小学校 ）　　学校番号　０２６

【様式】

目指す学校像	・笑顔と希望のあふれる学校　・美しく楽しい学校

重点目標	１　個別最適な学びの実現に向けた授業改善と児童の自己肯定感を高める教育活動の推進 ２　Withコロナの視点をもち、児童の希望をはぐくむ安心・安全な教育活動の推進 ３　コミュニティ・スクールとしての基盤づくりと学校・家庭・地域・行政の連携・協働体制の構築 ４　これからの時代に求められる資質・能力を養う実践的指導力の向上を目指す教職員研修の充実

※重点目標は４つ以上の設定も可。重点目標に対応した評価項目は複数設定可。
※番号欄は重点目標の番号と対応させる。評価項目に対応した「具体的方策、方策の評価指標」を設定。

達成度			
	A	ほぼ達成	（８割以上）
	B	概ね達成	（６割以上）
	C	変化の兆し	（４割以上）
	D	不十分	（４割未満）

学校自己評価

年度目標					年度評価			学校運営協議会による評価
								実施日令和５年１月２６日
番号	現状と課題	評価項目	具体的方策	方策の評価指標	評価項目の達成状況	達成度	次年度への課題と改善策	学校運営協議会からの意見・要望・評価等
1	（現状） ○全国学力・学習状況調査の結果では、国語・算数ともに全国・市平均を上回っており、概ね良好な成績となっている。 ○どの学年も積極的にタブレットを活用し、自身の理解度に合わせた学習を進め、主体的に楽しみながらタブレットを活用して学ぶことができる児童が多い。 （課題） ○全国学力・学習状況調査の結果分析から、算数の図形に関する問題では、他の設問より大幅に正答率が低くなっている。 ○低学年の児童の基礎学力定着に困難さを抱える児童の割合が高く、丁寧に繰り返し学習を進め、「分かる喜び」を実感することで主体的な学びにつなげていくことが課題である。	・学びの自律化に向けたタブレットの積極的な活用	①スタディサプリ、デジタル教科書を活用し、一人ひとりの課題に即した支援を実施する。 ②全国学力・学習状況調査において正答率が低くなる設問の単元に関する学習では情報を共有し、重点的に学習を進める。	①学校自己評価における「学校は、タブレット端末を効果的に活用しようとしている」（保護者）、「タブレット端末を効果的に活用した授業実践に努めている」（教職員）の質問項目に対する肯定的な回答の割合が８０％以上になったか。 ②学校自己評価の「分かりやすい授業実践ができている」（教師）の質問項目における肯定的な回答の割合が９５％以上になったか。	①学校自己評価のタブレット端末の効果的な活用に関する肯定的な評価は、保護者が８３％となり、前年度比１１％増とすることができた。教職員のタブレットを活用した授業改善への質問においても肯定的な回答」が９０％となり、前年度比２０％増となった。 ②「分かりやすい授業実践」に関する質問項目においても１００％の回答が得られ、前年度比４％増となった。	A	・現在、エヴァンジェリストを中心とした自発的な学習会が設定され、多くの教員が端末を活用した授業づくりに向けた資質向上に努めている。しかし、いずれも夕集後に実施しているため、勤務時間外となっている。夕集の曜日を変更したり、開始時刻を早めたりして、勤務時間内に資質向上につながる自主的な研修を行うことができるようにしたい。	・日々の取組が数字に表れている。 ・「思考力」は、課題として認識している。継続して取り組んでほしい。 ・先生方が「授業で端末を活用している」という思いと個の力量差による活用状況の違いは厳然として存在している。 ・端末を活用した学習と従来の学習、それぞれのよさがある。どちらも大切にしながら教育活動を進めていってほしい。 ・家庭でも学習内容の定着を図ることができるよう働きかけていきたい。 ・端末を活用した学びの成果を保護者にフィードバックしてほしい。
		・基礎学力の定着に向けた授業改善	③１，２年生への SA の重点的配置、３，４年生の算数科少人数指導の徹底に係る人事配置を行うとともに少人数指導教室を設置し、個に応じた指導ができるようにする。 ④朝自習の時間に「学習の時間」を設定し、学習時間を確保する。 ⑤家庭学習の定着に向け、学年だより、懇談会で家庭への協力を呼びかける。	③④⑤ 学校自己評価における「授業の内容が分かる」（児童）の質問項目に対する肯定的な回答の割合を１％向上させることができたか。 ③④⑤ 低学年において、学期末のまとめテストの平均点が全国期待得点を上回ることができたか。	③２人の SA（スクールアシスタント）を１、２年生に重点的に配置した。また、経験年数の少ない教員の学級への支援としても配置し、今しかできない学びの機会を逃さないようにして、基礎学力の定着に努めた。学校自己評価における「授業の内容が分かる」と肯定的に回答した児童の割合は９４％で前年度比１％の増となった。 ④朝自習の時間にスタディサプリを活用した「朝学習」を設定し、全校一斉に学ぶ時間を設け、学び方の定着を図った。 ⑤懇談会や学年だよりで家庭学習の定着に向けた保護者への協力依頼を継続して行った。低学年における学年末まとめテストの結果は、国語の知識・理解では全国期待得点を上回っているものの、国語・算数共に思考・表現に関する結果が下回った。	B	・第６学年を対象に実施した全国学力学習状況調査においては、得点、順位共に前年度を大きく上回った。現在の取組を継続し、学習習慣の定着を図る。 ・「思考力」を高める授業展開の工夫についての研修を行い、授業改善を行う。 ・低学年の段階で学び方の定着を図り、端末を活用した学習にも取り組みつつ、基礎・基本の徹底を図る時間を毎時間設定していくようにする。	
2	（現状） ○学校自己評価における「学校生活は楽しい」（児童）「お子さんは、学校生活が楽しいと話している」（保護者）の質問項目に肯定的な回答をした割合は、前年度と比較して３～４％向上した。 ○施設・設備の不具合による児童の怪我は、昨年度１件発生した。学校敷地内での教育活動による児童の怪我発生率は、前年度より減少している。 （課題） ○コロナ禍による児童の心の揺れに、よりきめ細やかに対応していくため、児童・保護者との相談体制をいかに充実させていくかが課題である。 ○安全点検を確実に行うとともに、児童への危険予知能力をはぐくみ、適切な行動ができるようにすることが課題である。	・児童一人ひとりへのきめ細かな支援に向けた相談体制の構築	①「心と生活のアンケート」の他、「なかよしのたね」という全校児童を対象としたアンケートを実施し、結果を基に全児童と面談を実施する。 ②困難さを抱える児童の課題解決に向け、教育相談・特別支援体制を整え、面談を実施するとともに、関係機関との連携を推進する。	①学校自己評価「先生に相談できる」（児童）「お子さんは、先生に相談することができている」（保護者）の質問項目に対する肯定的な回答の割合を５％向上させることができたか。 ②状況把握後、２週間以内にケース会議、関係機関との連携をはじめ組織的に対応し、該当児童・保護者へのフィードバック及び実践ができたか。	①市内全校一斉に実施しているアンケートの他、学校独自のアンケートを実施して、学期ごとに全員の面談を行い、個別の相談場面を増やすとともに、一人で抱え込むことの無いよう呼びかけたが、児童が２％増、保護者は１％減となった。 ②生徒指導・教育相談に係る内容については、当日もしくは放課後に受けた内容については翌日には、状況把握、組織対応ができるよう関係者によるケース会議を開き、対応策を講じ、児童・保護者へのフィードバックを行った。	B	・高学年での教科担任制が始まり、学級担任と児童が関わる時間が短くなっている。しかし、それは多くの教員と関わる機会をもつ好機ともいえる。引き続き、不安や悩みを感じた時には、身近な大人に相談するよう呼び掛けていくと共に教職員が積極的に声をかけていくようにする。 ・問題の覚知をした時点で学級担任が一人で抱え込むことの無いよう、引き続き風通しの良い人間関係を構築する。	・今後も子どもが元気で素直、明るく育っていってほしい。 ・褒めて伸ばす基本姿勢を大切にしていってほしい。 ・教室巡視などを通して、児童の様子をよく見て、寄り添った指導を継続してほしい。 ・特別な配慮を要する児童の様子を教職員がよく把握し、支援している。 ・けがの発生件数が減少しているとはいえ、８００件を超えている点に危惧を覚える。ケガの発生件数を抑えることができるような教育活動を推進していってほしい。 ・歩道橋の改修について、年月を重ね老朽化が進み、損傷が大きくなっている。子どもが転倒してけがをした子もいるので、メンテナンスが必要である。
		・安心・安全な学校生活の実現に向けた施設設備点検及び修繕の実施及び危険予知能力をはぐくむ指導の推進	①情報端末を活用し、校内で発生した怪我の件数や場所について情報共有し、予防に向けた指導を行う。 ②怪我の発生が多い学習内容については、年間指導計画の留意事項に明記し、安全な学習環境を整えることができるようにする。（場所・人・物） ③安全点検を実施し、適切に対応する。	①夕方の職員集会を利用し、怪我の発生状況や発生場所について周知を図り、未然防止できたか。 ②危険を想定した安全な行動が取れる児童の育成を目指し、授業時、朝・帰りの会等の時間を効果的に使い、事例を基に指導することで危機感を高め、怪我の発生件数を２％減少させることができたか。 ③月１回の安全点検及び毎日の校内巡視において安全点検を行い、修繕箇所については１週間以内に対応することができたか。	①夕方の職員集会のみではなく学年会の時間を活用し、教材研究を行い、安全な指導ができるようにした。 ②昨年度集計したケガは、８４６件であったが、本年度は８２９件となっており、２．１％減少させることができた。とりわけ発生場所として多く上がっていた　でのケガが減少していることは、指導の成果であると言える。 ③安全点検後の対応については、１週間以内に実施もしくは関係各所への連絡、依頼を行うことができた。	B	・昨年度、ケガが多く発生した教科や場所、単元等の学習においては、事前に情報を共有し、安全指導の徹底を図ることができた。 ・毎日の校内巡視で、ケガの発生につながる恐れのある個所については、小規模なものは覚知した時点で修理等を行った。学校配当予算では修繕の難しい個所については、計画的に営繕要望に挙げていく。	
3	（現状） ○昨年度の学校運営協議会準備委員会で熟議した内容を本年度の学校経営方針に反映させ、教職員に示し、共有した。 ○今年度、コミュニティ・スクールの本格始動に際し、前年度の熟議の結果をテーマに、学校・家庭・地域がそれぞれどのような取組ができるのかを協議した。 （課題） ○コロナ禍で従来通り、直接会って交流することが困難な中、地域の思い、児童の思いをどのように伝え合い、児童一人ひとりが未来の創り手としての意識を高めていくかが課題である。 ○学校・家庭・地域の一層の連携に向け、それぞれが主体的に行動できる課題意識をどのように高めていくかを模索したい。	・「心を潤す４つの言葉」の励行及び成果の共有	①学校・家庭・地域が一丸となってコミュニケーションの第１歩となる挨拶を「自分から」できる子をはぐくむ。 ②児童会と連携して、挨拶運動を実施するとともに、改善に向けた取組を協議し、児童主体で実現できるようにする。	①学校自己評価「進んであいさつができた」（児童）の質問項目に対する肯定的な回答の割合を８５％以上にする。 ②全校児童に対して、児童主体となった挨拶推進に関する取組を実施することができたか。	①学校自己評価における挨拶の項目では、肯定的な回答が８６％となり、１％増とすることができた。引き続き、挨拶をすることで人と人がつながる良さを指導していきたい。 ②児童会を中心として校門付近であいさつ運動を実施することができた。	B	①挨拶の実施状況については、客観的な数値で把握することができた。今後は、挨拶で人と人がつながるよさ、自分の挨拶が相手を明るい気持ちにしていること等を積極的に伝えて、意欲を高めていく。 ②児童会主催の挨拶運動の場や機会を増やしていく。	・「あいさつ」は、小学生の時は一番大事なところである。 ・あいさつが目覚ましくできるようになってきた。 ・引き続き、しっかり教育していってほしい。 ・大人がまず模範を示し、あいさつがしっかりできるようにしたい。「最初のあいさつは千金の値打ちがある」 ・小中一貫教育で加配された教員等が授業時における児童や教職員の様子を中学校に伝え、情報の共有を図ることができている。
		・学校・家庭・地域が交流できる活動機会の創出	①各学年の年間指導計画に地域へ出て行ったり、地域の人を招待したりする教育活動を位置付ける。 ②直接だけではなく間接的にでも地域の人の思いに触れ、児童の思いを伝える活動を実施する。	①全ての学年の年間指導計画に地域との関わりがある教育活動を位置付けることができたか。 ②学校自己評価「地域や社会に関心をもち、自分にできることを考えようとしている」（児童）の質問項目に対する肯定的な回答の割合が７割以上となるようにする。	①１年生の通学路探検、２年生の町探検を始め、清掃活動等地域とのかかわりができる教育活動を全学年に位置付けることができた。 ②学校自己評価に本年度新設した「地域や社会に関心をもち、自分にできることを考えようとしている」（児童）の質問項目に対する肯定的な回答は８３％となり、目標を大きく上回ることができた。	A	①実際に地域の人と関わり、その思いに触れることで育まれる心情、地域への愛着を積み重ねていけるような教育活動を模索する。 ②今後、高学年ではお世話になっている地域に、自分は何ができるのかという視点を持つことができるようにする。	
4	（現状） ○日々の教育課題に即対応できる力を養う研修を様々な機会を捉えて積極的に実施している。（研修の時間、夕集、学年会、部会等） ○高学年での教科担任制の実施により、担当教科について、より深く教材研究することができている。 （課題） ○経験年数の違いにより、学習指導、生徒指導・児童理解に関して早急に実践的指導力を高めることが求められる。	・教職員一人ひとりが児童の可能性を最大限に引き出そうと努めるとともに、実践的指導力を高める研修の実施	①年間を通じて、必要な ICT 活用に関する情報を Teams で共有し、即授業に生かすことができるようにする。 ②優れた先輩教員の授業や生徒指導の様子を参観し、具体的な子どもの姿、教師の姿を学ぶことができるようにする。（常に授業公開できるようにする。） ③夕方に実施している職員集会やデジタル版の日報を活用し、国や市の動向について周知を図る。	①全ての教員が日常的に ICT（タブレット・拡大投影機・大型テレビ等）を活用し、授業を行うことができたか。 ②全ての教員が「主体的　対話的で深い学び」の視点に基づく授業改善に努め、「よい授業アンケート」における平均値を前年度比０．１ポイント向上させることができたか。 ③様々な教育課題への対応を踏まえた国や市の最新の情報に関する周知徹底を図ることができたか。	①全ての教員が日常的に ICT を活用した授業実践を行うことができた。 ②「よい授業アンケート」においては、学校平均が因子①において前年度と同数、因子②は０．１ポイント増、因子③は０．３ポイント増、因子④は０．２ポイント増となった。 ③国や市の動向をできるだけ早く教職員に周知するとともに、放送を活用して児童への周知も行った。内容の多いものについては、必要に応じて日報に掲載し、いつでも確認できるようにした。この他、研修部より互いの授業を見合う期間を設定し、よい実践を自身の指導に生かすことができるようにした。	B	①ICT の活用や生徒指導等において、学んだことを生かして児童に変容が見られた場面を見逃さず、その指導のよさを価値付け、指導力の向上に資することができるようにする。 ②全学級積極的に授業公開を行い、先輩の優れた実践から学ぶことができるようにする。 ③国や市の動向を踏まえた教育実践ができるよう引き続き自発的な研修機会やたよりの発行を実施していく。	・グローバル・スタディでは、積極的に端末を活用した素晴らしい授業をしている。 ・先生方の努力、学び合いをしている姿、状況については、折に触れ保護者にも伝えていってほしい。